

湖沼環境の保護はなぜ必要か

笹川 通博

新発田市郊外にある樹潟の植物を調査している時である。熟年の女性たちのにぎやかな話し声が近づいて来たので、私はあわててハンノキ林に身を隠した。樹潟には貴重な自然が残されているといっても、その周辺は公園として整備されており、池には立派な歩道がめぐらされている。その上湿地の一部がハナショウブ園になっているので、初夏のこの時期には訪れる人も多いためである。それに比べて自分のていたらく、薄汚い作業服に歪んだ麦わら帽、何やら得体の知れない銀色の箱を肩から下げて、何よりも歩く所がまっとうではない。ひざまであるゴム長靴をはいて泥の中をびちゃびちゃ歩く。それでも羞恥心から、人が近づいたので隠れたのである。彼女らはこんな話をしている。林や草っ原など切ってしまうと、みんな“アヤメ”を植えてしまえばよい、と。

確かに、それは美しいであろう。季節になれば、一面に色とりどりの花が咲くのである。爽やかな五月の風が吹き、碧空にその色は映えるであろう。では、花の咲かない時期は。その時はその時で別の草花を植え、年中楽しめる水生植物園にすればよい。しかしそのために、目立たぬが貴重な野生植物がごとごとく失われてしまう。実際それらは人の手によって育てられて来た園芸植物と比べ、さまざまな点で見劣りがする。ヤナギトラノオにしろクサレダマにしろ確かに美しい花が咲くが、その美しさとして、一面に咲くハナショウブと比べればころもとない。ましてやムジナスゲなど美しくも何ともない。しかも彼らは野育ちで、容易には人に慣れないであろう。年中楽しめる水生植物園か、粗野で人を容易には近づけない自然のままの湖沼か、どちらが人間にとってより価値があるであろうか。

人間は自然と何らかのかかわりを持って生存する。今では山は崩され、森の木は切られ、自然はどんどん我々から遠ざかっている。そうした中で残された湖沼は、数少ない身近な自然である。そこで起きる変化はもちろん自然のものもあるが、それよりも今では人間による影響が大きく、かつ我々にとって重大な意味がある。特に湖沼の生態系はある程度閉じられたものである。従ってその影響は他の環境と比べてより端的に現われる。自然のままの湖沼、元来の植物が生育し、まだ汚されていない湖沼は、そこに住む人々の生活が自然と調和していることを示す。そうでない湖沼は、さまざまな程度において、人々の生活が自然と不調和であることを示すのである。とるにたらない、美しくもない野の植物たち。しかし彼らは、自然と我々人間とがどれだけうまくやっているかを代弁しているのである。そうした代弁者をわざわざ殺戮し、自然と人間とのつながりを断つことが、はたして賢明な自然とのつきあい方であろうか。湖沼が人工的なものになってしまうと、代弁者たちの声を聴くことができない。自然の声を聴くことができなくなってしまったら、我々自身の生活がどれほど調和を保っているか判断できなくなってしまう。そしてもう一つ重大な問題は、我々人間の心が、なんとも貧しいものになるのではないだろうか。美しい湖沼、美しい自然は、ややもするとかたくなになりがちな我々の心を、慰め、見開かせてくれる。なぜならば、我々人間の精神は、我々を育ててくれた自然と直結しているにちがいないから。

人間は野山を切り開いてその勢力を伸ばして来た。湖沼もその例外ではなく、今私達が生活しているこの新潟平野も、古人の営々とした開拓の歴史がなければ、とても人の住める場所ではなかったであろう。しかし人間もその営みも、大きく見れば自然の、そしてその営みの一部である。人間が開発するのは自然を利用するためであり、もしその自然が全く失われてしまったら、どうやって生きていけようか。人間が生み出した偉大な科学文明が、あるいは、それを可能にするかもしれない。地球上のあらゆるものが人間によって管理され、自然なきあとも、人間だけは生き長らえるかもしれない。それでも我々はふと、かつての自然の亡霊を、夢見ないとは言えようか。

一つには我々自身の生活環境の指標として、湖沼の環境を保護することは必要なのである。そのためには何よりもその実態を明らかにしなくてはならない。このことは同時に、湖沼の自然とつきあっていく上での第一段階でもある。ここでは岩船郡神林村の大池、小池と新発田市の樹潟の植物について次ページから掲載した。

(ささかわ みちひろ：新潟大学理学部大学院生)

冬の鳥屋野潟(新潟市)

雪のない冬の日、鳥屋野潟周辺を散策してみました。茶色になったアシが潟の縁を取り巻き、ちょうど垣根の様相を感じさせ、そのところどころから湖面が開け、冬の水鳥達が広々とした湖の中はどで遊ぶ姿を垣間見ることができた。鳥達の動きにつられて視線を斜めに天へ移していくと高くない空で、数十羽で行動している群れも冬空を楽しませてくれる。湖の東側から対岸のかなり向こうに、幾つかの高い建物と、一際高い県庁がのぞまれる。遠くにはあの弥彦山と角田山が揃って並ぶ。興味深く見わたせば、結構美しいパノラマが展開される。

都市化が進む現在、潟を自然の状態で保存していくにはむづかしいのですが、簡単に埋めてしまったり、生活排水の流れこむ場、あるいはごみすて場にならないよう、さりとしてすっかり整地をして都市公園にしてしまうのも悔まれる。ありのままの自然を楽しむ場として生きづいてもらいたい。小さな生物達のためにも……… (I.S.A.)